教育実践研究　第25集（2015）　127―132

[図画工作・美術]

子どもの思考力を育てる図画工作科の指導の工夫

加藤　　啓*

1　はじめに

今年度当校では，「思考力を発揮する子どもの育成」を校内研究のテーマとし，「よりよい問題解決を求め，自分の考えをつくる子どもの姿」を目指して授業実践に取り組んでいる。平成20年に告示された学習指導要領は，「生きる力」を育むという大きな方向性のもとに，思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。また，長年図画工作科の教科目標とされてきた「情操」という用語が教育基本法の条文に登場し，子どもの感性を重視することは，教科の枠を超えて指導すべき大切な事項であるといえる。特に図画工作科においては，教科目標に「感性を働かせながら」という文言が追加され，表現及び鑑賞の活動において，子ども自身の感覚や感じたことを大切にして指導することが示されている。

しかし，自分自身のこれまでの図画工作の指導を振り返ってみると，画一的な指導による描画法だけの教え込みや，子どもの作業に任せたやらせっぱなしの授業を多く行ってきてしまった。そのために，活動をはじめるとすぐに「できました」と，思いもないままに作品を完成させてしまう子や，「何を描けばいいのか思いつきません」と手が止まってしまう子がいる。富山祥端（2013）は，小学校の教員を目指す大学生900人を対象に，「『図画工作・美術』の思い出」を作文形式で書かせ，その整理・分析を行った。小学生には肯定的な評価を受けている図画工作であるが，富山曰く，分析の結果は「散々な状況」であった。特にマイナス面のキーフレーズが多く挙がったのが，構想指導にかかわるものである。「『イメージ・アイデアが浮かばない』類のキーフレーズの頻度の高さ，「『つくりたいものを考えて，に悩んだ』『自分なりに…と言われて辛かった』『頭の中で組立てを具体化できない』などに共通する『構想・企画の階段の登り方』教育のショートカット」こういった結果の原因を富山は「『自由な主体的活動』という放任」と述べている。

学習指導要領の改訂により，図画工作科においては共通事項が新設された。共通事項とは「表現及び鑑賞の活動の中で，共通に働いている資質や能力であり，造形活動や鑑賞活動を豊かにするための指導事項」として示されている。出来上がった作品や，道具の扱いの得手不得手ばかりに目がいきがちな図画工作科において，子どもたちがその活動を通してどのような資質，能力を養うのかをより具体的に示したものである。これは表現，鑑賞など全ての図画工作科の活動の中で，常に意識して指導していかなければならない内容である。また，各教科等における「言語活動の充実」は，「思考力，判断力，表現力等の育成」の効果的な方法・手段として位置付けられている。子どもたちは，言葉にならない曖昧なイメージを，造形表現をしていく過程で形や色に置き換え，「言葉」のように使って思考している。柴田・井上（2010）によれば「形や色彩，材料等の造形的な言語を豊かにとらえて表現したり鑑賞したりする活動を中心に据えながら，互いの作品や美術作品などを鑑賞し，文字や言葉で書いたり話し合ったりする活動を，いわゆる『言語活動』として適切に実施していく必要がある。」と述べ，図画工作科において言語活動を実施することが思考力，判断力，表現力を高めるために有効な手立てであるとしている。

以上のことから，子どもたちが自らの思いを豊かに表現し，思考力を発揮しながら活動を進めることのできる図画工作科の授業をめざし，授業実践に取り組んだ。

2　研究の目的

図画工作科の学習過程に，共通事項や言語活動を意識した活動を取り入れることにより，子どもが自らの感性をもとに思考力を発揮しながら活動を進めることができることを検証する。

＊ 上越市立直江津小学校

3　研究の内容・方法

第４学年（24名）第５学年（19名）おいて，図画工作科についての意識調査を行った。質問項目はます，「図画工作は好きか」ということ。そして作品が完成するまでの作業を「発想」「構想」「制作」「作品紹介」「鑑賞」という過程に分け，それぞれの過程が好きかどうかを「好き・少し好き・少しきらい・きらい」という４段階で評価する。また，そう答えた理由と，図工に関しての自由記述の欄を設けた。そして，その結果から，子どもが苦手意識をもっている活動について，それを改善できる活動を考察し授業実践をした。

4　実践の構想

実践はアンケートをとった第４学年と第５学年，そして第２学年で行った。第２学年については，低学年ということでアンケート調査は実施しなかった。しかし，普段の活動の様子を見ていると，やはり第４学年，第５学年と同様の活動での苦手意識や実態が見られる。第２学年では，「Ａ表現（1）材料をもとに造形遊びをする活動」，第４学年と第５学年では「Ａ表現（2）表したいことを絵や立体に表す活動」についての実践を行った。実践の中ではアンケートや普段の実態から，児童が自らの思いを豊かに表現し，思考力を発揮しながら活動を進められるよう以下の３つの手立てを講じた。

(1)　体験から思いを広げる活動

発想，構想の過程において「アイデアが浮かばない」「一つに絞ることができない」といった苦手意識を感じている記述をした子が，５年生で52.6％，４年生で41.6％いた。学習指導要領に示されているように，図画工作科では子どもが「感性を働かせながら」活動を進める姿が目標として示されている。また，学校教育法第21条２号及び第31条に「体験活動の充実」が示されており，藤江・三澤（2008）は「図画工作科では児童の実感の思いのともなわない活動は充実しません。感性を働かせる場として体験活動を重視しましょう」と述べている。そこで，発想や構想の過程に対し苦手意識をもっている子が，自らの体験を想起することで，創作活動に生かすことのできる活動を設定した。

(2)　試行錯誤する活動

制作の過程で，「絵が下手だから」「作品が上手につくれないから」といった記述を回答した子が５年生で21％，４年生で16.6％いた。学習指導要領においては，図画工作科の内容で「Ａ表現（1）造形遊び」の活動を中心に，「つくり，つくりかえ，つくるといった連続的な過程」を重視する内容が盛り込まれている。材料や空間と関わり，そこで生まれた形から発想を広げ，また作品に生かしていく，という拡散と収束を繰り返す子どもの姿は，まさに「思考する姿」そのものといえる。そこで，自らの思いを様々に試す中で，次第に自分の作りたいものや描きたいもののイメージを確かなものにできるよう，試行錯誤する活動を設定した。

(3)　他者との関わりにより自らの思いを広げる活動

４年生で，作品紹介の過程で「好き」「少し好き」という肯定的な評価をした子が68％，鑑賞の過程に肯定的な評価をした子が80％，５年生では，作品紹介の過程で64％，鑑賞の過程で95％の子が肯定的な評価をした。高学年に近づくにつれ，次第に自らの作品を人に紹介することに恥ずかしさをもつ子が増えるが，友達の作品を見て感想を伝え合うことについて抵抗感を感じている子は少ないことが考えられる。他者の作品を見ることは，新たな考えを見つけたり，自らの考えを見つめなおしたりするために有効な手立てであると考える。学習指導要領においても，「表現と鑑賞は関連して働き合うもの」としてとらえられている。そこで，作品を作成している途中にも，友達と関わる活動を意図的に設定することで，さらに自らの思いを広げることができると考えた。

5　授業実践①（２年生による実践）

(1)　単元名　「レインボーハウスをつくろう　～大根の収穫祭に向けて～」

(2)　単元の目標

材料や場所の特性を生かして，思いついたことや表したいことを試しながら，自分たちの家をつくる。

(3)　単元の指導構想

本単元では，ビールケースや机を並べて教室のベランダに自分たちだけのレインボーハウスをつくる活動を行った。

子どもたちはこれまでの活動から，材料を並べたりつなげたりしながら，自分の思いや願いを生かして自由に創作する活動を重ねている。「大きな紙を」では，新聞紙を使い，材料の特徴や質感を体全体で味わいながら，並べたり丸め

たりする活動を行った。活動を進めていく中で，偶然できた形に自分なりの意味をもたせ「服をつくろう」「家をつくろう」といった願いを基に活動を進めた。本単元では，その活動をさらに発展させ，自分の発想を生かしたり仲間と協力したりしながら，大きなものをつくっていく楽しさを，体全体で味わってほしいと考えた。

本単元ではまず，グループで自分たちの理想のレインボーハウスの設計図を作成する。子どもたちは「こんなレインボーハウスをつくってみたい」という自分たちの理想の形を思い描く。そこから，レインボーハウスを実現させるために，これまでの図工での造形活動を想起させ既習経験を生かすよう働きかけた。また，材料には多種多様な材料（段ボールやビニールテープ，ブルーシートなど）を用意しておく。

子どもたちは自分たちの理想を実現させるにはどうしたらよいだろうと，様々に工夫し試行錯誤しながら活動を進めていく。活動を進めていく中で自然と同じ目的をもった友達同士がかかわり合い，目的を共有した友達との協働が生まれ，一人では味わえない満足感を得ると考えた。

活動をした後には，つくったものを見たり，作品の中に入って楽しんだりして，友達の作品を身体全体で味わう時間を位置付ける。そして，そこから「今度はこんなことをしてみたい」という思いをさらに広げ，新たな活動を構想する。このように子どもたちの思いを基に，作品をどんどんと作り変えることで，自分たちだけの理想のレインボーハウスを目指し，創作活動を展開していく。

(4) 指導の実際

① 体験から思いを広げる活動

以前に行った「大きな紙を」という単元で，新聞紙を自由に切ったりつなげたりして，大きく広げたり服をつくったりした活動を想起させるために活動写真を提示した（図１）。そして机やいす，ビールケースを並べて何ができるかを考えさせた。子どもたちは「家」「秘密基地」「スカイツリー」など，新聞紙でつくったものよりも広いものや大きなものを想像し，「作りたい」という思いを膨らませた。以前から活動を行っていたこともあり，「早くやりたい，つくりたい」と頭の中で想像を広げている様子であった。

（図１）

② 試行錯誤する活動

様々な材料を用意したことで，子どもたちはそれをつなげたり，並べたりしながら思い思いの活動をはじめた。途中で教師が「これって何に見える？」と投げかけた。あえて，それを作っていた子とは違うことに聞くことで，偶然できた形に意味を見出そうとする姿が見られた。最初はただやみくもに並べたりつなげたりしていた活動も，次第に子どもたちは「見立て」を行い活動するようになっていった。机やいすをならべていたグループはそれを壁に見立て，秘密基地や家などをつくった。またそこに椅子に背もたれと肘掛などをつくり，マッサージチェアーのような形にした。スズランテープをつなげていたグループは，それをカーテンに見立て，色彩を工夫しながら張り付けていた。(図２)

（図２）

「段ボールで扉をつくろう！」　「カーテンみたいに見えるかな？」

③ 他者との関わりにより自らの思いを広げる活動

活動していく中で，自然といくつかのグループになり，集団での活動が生まれていった。途中で活動を止め，それぞれがつくったものを見て回る時間を設けた。そこでそれぞれの子どもに「これは何？」とインタビューを行った。インタビュー後の活動では，最初は一人で椅子に座り，友達の活動を眺めていた子も，一つのグループが机や椅子などの並べて大きな家をつくっていたのを見て，その家の中にある椅子をつくる活動をはじめた。「より広い場所に，より高いものを作りたい」といすや机を並べていたグループは，家をつくっているグループの活動を見て，「いっしょにやらない？」と声をかけ，グループ同士を合体させ活動を進めた。次第に全員が一つの大きな家をつくろうという方向に向かい，窓をつくったり扉をつくったりと，活動が広がっていった。

6　授業実践②（4・5年生による実践）

⑴　単元名　「感じたことを伝えたい」

⑵　単元の目標

身の回りのものや，自らの体験を見つめ，感じたことがつたわるようにくふうして絵に表す。

⑶　単元の指導構想

本単元では，自らの体験をもとに発想を広げ，そのとき自分が感じたことを絵に表す活動を行った。

活動の前にはまず，イメージマップを用いて自らの体験を振り返り，発想を広げる活動を行った。イメージマップを書くことで，頭の中にあるぼんやりとしたイメージをより明確にし，「これを描きたい」という思いを明確にすることができる。またそのイメージマップをもとに，下絵のもととなる絵を描く。Ａ３の紙を四つに折り，４つの窓をつくってそこに絵を描く。そこで描く絵はまた，絵を描くことに苦手意識がある子でも，そこに簡単な絵をいくつか描くことで下絵に移ったときに比較的抵抗感なく活動に入ることができると考えた。次に，自らの描く絵を「形」「色」「イメージ」「オノマトペ」という四つの要素で言葉に表す活動を行った。自らの描きたい様子がより明確になるように言語化し，また「イメージ」「オノマトペ」という自分の頭にある要素をどうすれば絵に表すことができるかを考えた。

活動していく中で，どんな出来事があったかを友だちと話し合ったり，互いの作品を見合ったりする。友だちとのかかわりから，自分の絵をどのようにするかを見つめ直しながら活動を進めた。

⑷　指導の実際

①　体験から思いを広げる活動

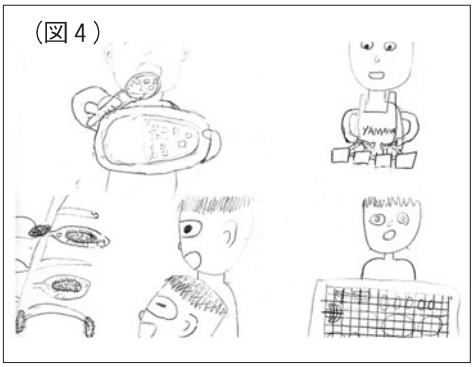
絵のテーマは「総合的な学習の時間での活動」「宿泊体験学習での体験」という，子どもが実際に体験したこととした。与えられたテーマから自分の体験をもとに描きたい内容を想像する。そのとき子どもたちの頭の中には明確に「こういう絵が描きたい」というイメージができているわけではない。何となく「こんな感じの絵が描きたい」という漠然としたイメージがある。絵が得意であったり，イメージを頭の中で構成できたりする子は，この段階で画用紙をわたせば，自分の頭の中の「こんな感じ」を絵に表すことができる。しかし，それが苦手な子にとっては，「アイデアが浮かばない」「想像力がない」という思いへとつながり，発想の段階から手が止まってしまう。そこで，まずは自分の頭の中にある「こんな感じ」をより具体的にするために，イメージマップ（図３）の作成を行った。紙の真ん中に絵のテーマとなる言葉を書き，それを中心に連想した言葉をつなげていく。関連する言葉は線でつないで，図として表す。そうすることで，自分の頭の中にある「こんな感じ」を視覚的に捉えられるようになり，絵のパーツが出来上がっていった。

（図３）

②　試行錯誤する活動

作成したイメージマップをもとに，下絵の基となるアイデアシート（図４）を描いた。Ａ３の紙を四つにおり，４つの“窓”を作る。それを画用紙一枚分に見立て，大まかな構成を練った。自分が何をどれくらいの大きさで描くのか，という絵の構成を４つのパターン描かせた。描きたい絵がいくつかある子には，この段階でまず全てのパターンを描かせた。

（図４）

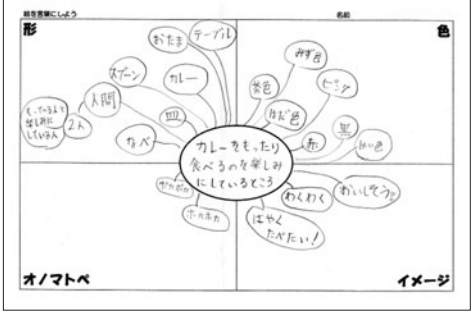


次に，共通事項をもとに，「形」「色」「イメージ」「オノマトペ」という４つの要素で絵を鑑賞する活動を行った。鑑賞したのはゴッホの「スターリーナイト」とピカソの「ゲルニカ」である。鑑賞シートは，イメージマップと同様の形式で，中心に作者名と題名を記入し，その周りに４つの要素で分類した言葉を記入させた。「形」「色」には，その絵を見て描いてあるものは何なのか，どのような色が使われているのかを書いた。「オノマトペ」「イメージ」には，その絵を見て自分が想像した音や感情，様子などを書かせた。鑑賞活動を行った後，再び自分が描きたいテーマで，４つの構成要素についてのイメージマップ（図５）を書かせた。それをもとに，再びアイデアシートを見て，自分があらわしたい「感じ」が表れる絵になっているかを考えさせ，下絵にする絵を決定した。

③　他者との関わりによる自らの思いを広げる活動

活動テーマを，全員が共通に体験した活動にしたことにより，作業中には「どんなことしたっけ？」「あーそうだった」と対話を通して活動を想起する姿が見られた。教師との対話により，描きたい内容を決めていく活動はよく用いられるが，子ども同士の自由な対話の中でそういった活動が生まれるよう，下絵を描く際や，イメージマップを書く際には班で机を合わせて活動を行った。

（図５）



７　考察と課題

⑴　体験から思いを広げる活動

以前に行った活動を写真で想起させたり，イメージマップを書いたりすることで，子どもの思いを引き出したり，描きたい体験をより明確にしたりすることができた。２年生の実践は，前回の活動の発展的な課題であったため，どうやって活動を進めるかというイメージが子どもの中にでき，見通しをもって活動することができた。また，そのときに楽しかったことを想起し，「今度は何ができるだろう」と思いを巡らす様子があった。４・５年生の実践では，体験を想起し，そのときの様子や自らの思いを大切に，活動を進めた。「総合的な学習の時間の活動」「宿泊体験」という，子どもにとって楽しかった思い出を想起させたことで，活動はスムーズに進んだ。図画工作科の目標である「つくりだす喜び」という文言が示す通り，図画工作の活動は子どもの「楽しい」「やってみたい」という思いに支えられている。発想の始まりとして子どもたちのそうした思いを引き出すことのできる課題を設定することが重要であると感じた。

⑵　試行錯誤する活動

２年生の実践では，それぞれの子どもが材料や場所とかかわる中で，自然と物を「見立て」，自分なりの意味をもちながら活動を進めていた。たとえば，段ボールの折り目を背もたれに見立ていすをつくった子，スズランテープを虹のように貼ることで黒板を看板に見立てる子などがいた。様々な種類の道具を豊富に用意したことで，発想を広げ，思い思いの活動を展開することができた。また活動後に教師が，つくった子どもにインタビューをした。「みんなのレインボーハウスだから，看板が必要だと思って，黒板に虹をつくりました」「家の扉をつくって，ガムテープで出口と書きました。裏には入口と書いてあります」と自分のつくった作品をクラス全体に紹介した。並べたり，つなげたり，積み上げたりすることで偶然的にできた形からイメージを広げ，それに意味付けをして，再び材料と関わる，という子どもの「思考する姿」が見られた。西村（2012）は「『自由』という言葉は，いままでもたびたび使われてきた。それはややもすると『放任』と誤解されてきた感もある。しかし『自由』とは，意思決定することの自由なのである。授業とは，教師が示した極めて意図的な環境である。その提示された選択肢のもとで，子どもたちが選ぶ（表現する）ことを模索する。それが自由なのである」と述べている。今回の活動では，豊富な材料と，日常使っている教室という空間を自分たちで作り変えるという状況により，子どもたちが「自由」な発想で活動を展開することができた。

４・５年生の実践では，イメージマップによる自分のもつイメージの言語化と，アイデアシートでそれを絵に表す，という活動を行った。言語から発想し，それを絵に表し，という絵と言語の行き来の中で次第に自分の描きたいイメージを確かにする子どもの姿があった。イメージを言語化するために，「オノマトペ」という要素を入れることで，言葉にはしづらい「感じ」を言語化することをねらった。しかし，結果としてはあまり発想に広がりは生まれず，そこで手が止まってしまう子もいた。「ワクワク」「ドキドキ」といった感情をいかにして絵に表すのか，という技能的な指導が難しく，うまく絵に生かせない子どもがいたことが課題としてあげられる。

⑶　他者との関わりにより自らの思いを広げる活動

活動を進める中で，自然と他の人がどんなことを書いているかを見あったり，どんなことがあったかを話しあったりしながら活動を進める姿があった。また，同じ目的をもった子どもが自然とグループをつくって活動を進める場面も見られた。

２年生の実践では，最終的には一つの大きなレインボーハウスをつくるという課題に向かわせるために，「隣のグループと合体してみたら」というような教師からの声掛けを想定していた。しかし，それ以前に，自然といくつかのグループとなり活動をしていた。これはねらっていた「他者とのかかわり」が子どもたちの中から自然と生まれた瞬間であった。このようなことが起きた要因として「場所や材料にある程度の制限があったこと」，「普段からかかわり合う子

どもたちの良好な関係ができていたこと」という２つが考えられる。一人だけで作業をしていた子も，大きな家をつくるという友だちの活動を見て，扉をつくりたい，カーテンをつくりたいという課題を見つけ，友達とかかわりながら活動を展開していた。全員で大きな一つの作品をつくる活動を仕掛けたことで，友だちとかかわる必要性を生み出すことができた。

４・５年生の実践でも，友達との対話を通して考え，その時の様子や思いを広げる姿があった。制作段階においては，絵の苦手な子が，上手だと思った人の絵を真似して描く様子があった。課題として，それが完全な模倣にならないようにする必要がある。竹井（2012）は「プロの作家でさえ，自分の制作に先立って様々な作品を参考にしている」としながら，「問題は，参考作品が１点だけであったり，似たような作品，上手な作品といえるようなものであったりすることです。」としている。友だちの作品やアイデアのよいところを参考にするには必要なことだが，いくつかのアイデアを自分なりに組み合わせたり，構図やイメージを真似て完全な模倣にならないように配慮したりする必要がある。

8　終わりに

子どもの思考力を育てることは，これからの学校教育において全ての教育活動の中で大切にしなければならないことである。図画工作科は，感性を大切にしながら，子どもの思いを生かして活動を繰り広げるよさがあり，思考力を育てるのに大変有効な教科であると考える。そのためには，学習指導要領のポイントしてあげられる，言語活動や共通事項を意識し，目に見えない子どもの思いや感覚を大切にしながら授業を展開することが求められる。そして全ての子が，自分の思いや発想を作品に表現する喜びを感じながら，活動に没頭する図画工作の授業をめざし，今後も日々の実践に取り組みたい。

9　引用・参考文献

・安彦忠彦監修，藤江　充，三澤一実編著　「小画工学習指導要領の解説と展開　図画工作編」教育出版，2008
・太田景子，末口久美子，鈴木貴久，熊谷佳子　「〔共通事項〕を生かして感性をはぐくむ図画工作・美術科の授業」川崎市総合教育センター研究紀要，2010
・柴田信孝，井上香織　「豊かな感性をはぐくみ，思考力，判断力，表現力等を高める図画工作科授業の工夫・改善～言語活動の充実を通して～」熊本県立教育センター研究紀要第39集，2010，65～72pp
・小学校図画工作授業づくり研究会，竹井　史編　「この１冊でバッチリ成功！学級担任の図工授業完ぺきガイド」明治図書，2012
・富山祥瑞　「教科としての『図画工作・美術』が抱える課題－教育学部・大学生の回想による調査報告－」愛知教育大学研究報告（教育科学編），第62輯，2012，207～214pp
・西村徳行編著，辻本紳一朗，津室和彦著　「プロ教師に学ぶ小学校図画工作科授業の基礎技術Ｑ＆Ａ」東洋館，2012
・福岡大学附属小倉小学校著　「創造的に思考する子どもを育てる－学習材・単元展開・言語活動の仕組み方－」明治図書，2013
・三戸谷史　「思考力，判断力，表現力を育む図画工作科の指導のあり方－ミニ鑑賞交流活動と制作をみつめる活動を取り入れた造形活動を通して－」佐賀県教育センター教育論文，2008
・文部科学省　「小学校学習指導要領解説　図画工作編（平成20年３月）」日本文教出版